伊吹島舟唄

讃岐は、波静かな瀬戸内海に面し島々も多く、至る所に豊かな漁場がありました。漁港も多く、いろんな漁船が出入りしていましたが、その多くは小さな船で、昔はゆうゆうと舟唄を歌いながら櫂を操っていたようです。各地の漁港には、各種の舟唄が残されていますが、「ヨーオェ」あるいは「ヨー」で終わる唄が多く、これは櫓や櫂を操る掛け声がそのまま舟唄の囃子（合いの手）になったもので、舟唄の特徴となっています。

観音寺市沖合の伊吹島には、昭和の初め頃まで「ちょんこ船」と呼ばれる木造の和船がありました。「伊吹島舟唄」は、この船で歌われていたことから「ちょんこ節」とも言われています。「ちょんこ船」は、船頭と3人の漕ぎ手からなる4人乗りの3丁櫓の船でした。港のある伊吹島を宵に出て、沖で漁をしている船から船へと回航し、主として漁獲物の海老を買い集めていました。現在の漁船は、エンジンで動くものがほとんどで、船足が早く港との行き来が短時間でできますが、昔は、人力の櫓漕ぎ船が中心で、速度も遅く漁獲物が多ければ多いほど、更に船足は遅くなりました。そのため当時は、漁に専念する船と漁獲物を運ぶ船に区別され、「ちょんこ船」は、漁獲物を運ぶため早い船足で沖と港を行き来していました。

広島・尾道市因島箱崎／高橋克夫氏提供

道具（櫓と櫂をのせた船）／瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

伊吹島舟唄　歌詞

1、ハーちょんこ乗りにはヨーエ
妻子はいらにゃヨーエ
晩にゃ出ていて
朝戻るヨーエヨーエヤー

2、ハー沖のかもめにゃヨーエ
潮どき問えばヨーエ
私や立つ鳥
波に問えヨーエヨーエヤー

3、ハー沖の暗いのにヨーエ
白帆が見えるヨーエ
あれは紀の国
みかん船ヨーエヨーエヤー

讃岐麦打ち唄

うどんの名所讃岐では、気候が温暖なため稲作の裏作として主に裸麦が作られていました。昔は、麦を刈り取ると、まず、かなばし等で穂を取り、穂は農家の庭先などで筵の上に広げ、天日でよく乾かし、唐竿（別名：連枷、くるり）を用いて脱穀の作業が行われました。唐竿は長さ2メートルあまりの竹竿の先にぶちがついており、これを振り上げると廻るような仕組みになっています。のちに竿と短い棒を連結していた金具は鉄鎖、短い棒は鉄造りとなっていきました。筵いっぱいに広げた麦の穂の上にこの唐竿を打ちおろし、脱穀の作業を行いましたが、調子を整えるために「麦打ち唄」が歌われました。麦打ち（棒打ち）の作業を行う初夏は暑く、その仕事は炎天下での作業であったため、汗まみれになります。水をいくら飲んでも足りなくなるほど、農作業の中でもとびきりたいへんな重労働だったそうです。重労働をまぎらせるためにもこの「麦打ち唄」が歌われました。麦打ち唄は、江戸時代から昭和の中頃まで麦の収穫期には、広く各地で歌われてきましたが次第に姿を消していきました。作業の模様を俳句にしたものを二句ご紹介します。

「長旅や駕なき村の麦ほこり」　与謝蕪村　「蕪村句集 」
「麦ほこりかかる童子の眠りかな」　芥川龍之介　「澄江堂句集」

唐竿による脱穀は、稲や麦だけでなく他の作物にも幅広く応用できたので、世界各国に数多く似たようなものがあります。西洋では唐竿状の農具を元にしたフレイルと言う打撃武器が開発され、甲冑を身に纏い、剣では有効な打撃を与えることが難しい重装騎兵に対する対抗手段として大いに普及しました。沖縄のヌンチャクも、唐竿をもとに考案されたと言われています。

麦打ち唄／讃岐民謡保存会

道具（唐竿）／瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

讃岐麦打ち唄　歌詞

1、（コラサノサッサ　ドッコイサノサッサ）
ハーア　主の便りが（コラ）
ないぞの様よ（ハイ）
思う便りがありゃ住まれる
（ソラココが鰆の骨どころ（ホイ）骨どころ）

2、（コラサノサッサ　ドッコイサノサッサ）
ハーア　女木と男木に（コラ）
豊島を入れて（ハイ）
あれをみよとに　小豆島
（ソラココが鰆の骨どころ（ホイ）骨どころ）

3、（コラサノサッサ　ドッコイサノサッサ）
ハーア　すいた殿御に（コラ）
たから笠きせて（ハイ）
屋島　壇ノ浦うろうろと
（ソラココが鰆の骨どころ（ホイ）骨どころ）

4、（コラサノサッサ　ドッコイサノサッサ）
ハーア　揃た揃たよ（コラ）
白い菅笠が（ハイ）
こちの殿御（とのご）もあの中に
（ソラココが鰆の骨どころ（ホイ）骨どころ）

5、（コラサノサッサ　ドッコイサノサッサ）
ハーア　思うて来たかや（コラ）
裏から来たか（ハイ）
私しゃ裏から思うて来た
（ソラココが鰆の骨どころ（ホイ）骨どころ）